

## 母の損失という語り

— 川端康成の『住吉』連作における転移と反復 —

### A Tale of the Loss of the Mother

— Repetition, and Transference in Kawabata Yasunari's "Sumiyoshi" Series —

メベッド・シェリフ

Mebed, Sharif

キーワード：フロイト、『住吉』連作、川端康成、精神分析

Key word: Freud, Psychoanalysis, Sumiyoshi, Kawabata Yasunari

#### 要約

本研究は川端康成による四つの短編—『反橋』（1948）、『しぐれ』（1949）、『住吉』（1949）、『隅田川』（1971）—に焦点を当てたものである。最初の三作品は第二次世界大戦後数年間に書かれた。最後の作品は川端の自殺の数ヶ月前に完成した。これらの短編の一つひとつは、同じグループの登場人物によって構成されており、ひとつの作品の四つの部分であると考えられるべきである。これらの短編を精神分析的視点から考察した。『反橋』の分析において、主人公の行平は、住吉神社の反橋の上で聞いた母の告白によってトラウマを受ける。このトラウマは、主人公にとってエディプス・コンプレックスの終結であると分析する。次に、『しぐれ』における夢の描写と、その中における川端の「転移」の使用を考察する。ついで、『住吉』で描写される幼年時代のトラウマと、大人になってからの性的倒錯の関係を、反復の役割に注目しつつ取り上げる。最後に、『隅田川』におけるエディプスの主題の描写を考察する。その結果、川端は主人公の描写においてフロイトのテーマを援用し、フロイトの概念がこれら四つの作品の中心概念になっていることを結論としている。

#### Abstract

This research focuses on four short stories by Kawabata Yasunari: "Sorihashi" (1948), "Shigure" (1949), "Sumiyoshi" (1949) and "Sumidagawa" (1971). The first three were written in the years following World War II. The final one was finished months before Kawabata's suicide. Each of the short stories features the same group of characters, and should be considered as four parts of one work. I analyze the stories from a psychoanalytical standpoint. In my analysis of "Sorihashi", I consider the depiction of the traumatic end of the Oedipal Complex for the main character at the top of the

Sorihashi-bridge in the Sumiyoshi-Shrine. Next, I consider the depiction of dreams in “Shigure” and Kawabata’s use of ‘transference’ therein. Then I take up the relationship between childhood trauma and sexual perversion in adulthood as depicted in “Sumiyoshi” noting the role of repetition. Finally I consider the depiction of Oedipal themes in “Sumidagawa”. I conclude that Kawabata used Freudian themes in his depiction of the main character, Kohei, and that Freudian concepts were central to the formation of these four works.

## はじめに

住吉連作と呼ばれる作品は第二次世界大戦が終わってから間もなく発表された三作『反橋』(1948)<sup>1</sup>、『しぐれ』(1949)<sup>2</sup>、『住吉』(1949)<sup>3</sup>、川端が死ぬ直前に書かれた一作『隅田川』(1971)<sup>4</sup> という合計四作品で構成されている。四編を通して同じ人物(行平、須山、行平の継母と実母、双子の売春婦)が登場する。それに、「あなたはどこにおいでなのでせうか」という言葉が四編とも書き出しにある。また、主人公の生い立ちから老後までの一生が描かれている。それぞれの作品は「です・ます」体で書かれており、一作目の『反橋』は発表ときに『手紙』という表題であり、したがって、この小説全体は一つの手紙であると見なすべきであろう。1920年代に発表された『青い海、黒い海』に出てくる「遺書」と同様、この書簡の宛先は不明である。また、『隅田川』は川端の自殺直前に書かれており、川端の生涯で最後の作品に当たり、また主人公は自殺を仄めかしているため、ここに川端自身の自殺の意味が隠されているとして、注目されてきた作品でもある。川端自身の自殺の意味はともかく、川端がわざわざ20年前に書いた三部作に生涯最後の作品としてもう一編を付け加えたことには大きな意味があると考えられる。

本稿の目的は、従来の研究で取り上げられることがなかったフロイト思想の川端作品における役目を明らかにすることである。特に、エディプス・コンプレックスと、『快感原則の彼岸』(1920)に出てくる「反復衝動」、「転移」、「死の本能」という三つのテーマに注目する。『快感原則の彼岸』はフロイト思想の発展の中での大きな曲がり角であった。フロイトによると、「快感原則」とは人間の殆どの行動を動機付けるとされる本能である(快感を求めて、不快なことを避けることである)。しかし、例えば、自らの腕に繰り返して傷を付けるというような人間の行動は「快感原則」では説明できない。そこで、フロイトは『快感原則の彼岸』で初めて自分の理論の大きな修正を試みた。フロイトは、このような自傷行動は、神経症の患者が抑圧されたトラウマを現在の生活の中で繰り返して再現しようとするものであると見なしていた。無意識に潜むトラウマの傷跡や衝撃的な体験の記憶を思い出せないまま、それによって不快な行動を繰り返すことがその特徴である<sup>5</sup>。しかしながら、トラウマをそのまま繰り返すのではなく、それとなく別の対象に精神のエネルギーを注ぐという。このように、元の感情の対象とは別の対象に感情を注

ぐことは「転移」と呼ばれる。

また、フロイトの思想において、原型的なトラウマとは、母親との（想像の上の）恋愛関係の終わりを意味する。つまり、エディプス期の結末である。母を独占できないと分ってしまう時に、恋人としての母の喪失による傷が心に残るとフロイトは論じている<sup>6</sup>。『住吉』連作の主人公である行平は、上で触れた反復衝動を性格の重要な特徴として持っている。また彼のエディプス期の結末に関する思い出が作品に登場する。同じ『快感原則の彼岸』で初めて紹介された「死の本能」もこの作品に著しく現われている。そのため本稿では、川端はフロイトの思想を『住吉』連作の主人公の心理描写に取り入れていたのではないかという点を論じる。

## 作品の概要

『反橋』で、行平という初老の主人公は五歳の頃の体験の記憶について語る。主人公は何年かぶりに「反橋」のある住吉神社へと旅して、旅館に泊まる。そこで、様々な記憶が甦る。記憶の中で、母親は住吉神社の険しい反橋の頂点まで五歳の行平を一人で登らせ、その頂点で行平の母は、自分は行平の本当の母ではないと言う。これまで実の母だと思っていた母は継母であり、実はその姉が生みの母であると言われる。五歳の主人公はそれを初めて知る。更に継母は、実の母が近頃死んだということも幼い行平に説明する。川端はこの全てを主人公の思い出の中で描き出す。

『住吉』連作の第二作は『しぐれ』であり、この作品は、住吉神社での体験から数十年の後、老いはじめた行平の孤独の生活を描いている。行平は夢を見て、眼を覚ましてから、夢の意味を理解するためにその内容について連想し、亡き友人の須山を思い出す。さらに、須山と一緒に交際していた双子の売春婦とのエピソードが彼の記憶の中で描かれる。

『住吉』連作の第三作は『住吉』である。この作品は、育ての母が『住吉物語』をよく読んでくれたという行平の思い出を中心に展開する。『住吉物語』の中には、父親にいじめられて住吉神社に逃げる少女の話がある。やがて、『住吉物語』に関する思い出が終わって、行平は養母の琴の稽古のことを思い出す。養母が盲目の琴の師匠を嫌っていること、また行平が稽古の最中に乱入し、母に足の霜焼けと背中を琴の爪で引っ掻いてもらったという思い出が描かれている。

連作の最後の一編『隅田川』で、行平は能楽の「隅田川」の話を思い出す。能楽の『隅田川』は、子供が誘拐された話である。一年経っても子供は戻って来ないので、子供を失った母親は発狂して、隅田川のお寺に子供を捜しに行く。そこで、母親は亡くなった子供の幽霊に出会う。その思い出の後、主人公は双子の娼婦について考え、『住吉物語』で母がしてくれたように娼婦に背中を掻いてもらうように頼む。

### 『反橋』における痛ましい原風景とその反復

さて、各作品の分析に移る。すでに触れたように、フロイトによると、子供は自分の母親を恋人と考えていて、父親はその理想の関係を妨げる存在である。男の子にとって、自分の母と結婚することを約束したり、父親が死んだらいいと思ったりすることはごく普通であるとフロイトは論じている<sup>7</sup>。しかし、成長と共に、母親と結婚することも、父親の死を望むことも良くないと知り、少しずつエディプス的な感情を抑圧し、それらを意識から追い出すのであるとフロイトは説明している<sup>8</sup>。この過程が、健康な人間のエディプス期の結末である。フロイトによると、神経症の患者の多くは、このエディプスの終結（つまり五、六歳のころに異性の親が自分の恋人であるという観念をあきらめる時）において、何らかのトラブルを経験しているという。多くの神経症の患者を悩ませる罪悪感がエディプス・コンプレックスに由来することは疑いの余地がないとまでフロイトは主張している<sup>9</sup>。後で見るように、『住吉』連作の主人公は『しぐれ』で自分の手が「罪深い」と述べており、四作を通して恋愛の対象は不適切な相手（名前まで同じである双子の娼婦と、未成年の少女、それに自分の母親）に限られている。主人公によると、この事実は反橋の上で母から聞いた話と関わりがあるということである。その体験は次のように描かれている。

五つの私は母に手をひかれて住吉へ参りました。手をひかれてといふのが決して形容ではなく、私は手をひかれなければおもてに出られないやうな子供でありました。私と私の母とは反橋の前に長いこと立つてゐたやうに思ひます。私には反橋がおそろしく高くまたその反りがくうつとふくらんで迫つて来たやうにおぼえてゐます。母はいつもよりもつとやさしく私をいたはりながら、行平も強くなつたからこの橋が渡れるでせうと言ひました。私は泣きさうなのをこらへてうなづきました。母はじつと私の顔を見てみました。

「この橋を渡れたら、いいお話を聞かせてあげるわね。」

「どんなお話？」

「大事な大事なお話。」

「可愛なお話？」

「ええ、可愛なお話、悲しい悲しいお話。」

そのころ大人は可哀想で悲しいお話を好んで、子供に聞かせたものであつたやうです。

反橋はのぼつてみると案外こはくありませんでした。…（省略）…その橋の上で母はおそろしい話を聞かせました。

母の言葉ははつきりおぼえてをりません。母は私のほんたうの母ではないと言つたのであります。私は母の姉の子で、その私のほんたうの母はこのあひだ死んだと言つたのであります。

(省略)

姉の死といふ衝撃で真実を明かさずにゐられなかつた母を私は憎しみはしませんし、それが反橋の上であつたかなかつたかはとにかく母の白いあごに涙の流れたのをおぼえてゐますけれども、私の生涯はこの時に狂つたのであります。<sup>10</sup>

この幼児期の原風景について、主人公は「生涯を狂」わせたと示している。この母親の告白によって、現実による不安や心配とは無関係な行平の理想的幼児生活が一転する。母は母ではなく他人であり、本当の母は死んでいる。そして自分は捨てられた子供であると知らされる。主人公は「手をひかれなければ、おもてにでられない」と書かれているところから考えて、行平は家庭の中にいるのを居心地よいと思われる。彼は外の大人の世界には行こうとしない。ここには、お母さん子という、母と子の親しい関係が思い浮かぶ。そういう行平が唐突に母から自分の本当の母ではないと聞かされ、自分は誰なのかというよう自己認識の危機に晒されたのであろう。また、母は別であっても父は実際の父親である。従って、父は姉妹の一人に子供を産ませ、もう一人と結婚して、その子供を育てさせたのだ。行平は「私の出生が尋常なものではあるまい、生みの母の死が自然なものではあるまいと、やがて疑ひ出すやうになりましたのもしかたのないことであります」<sup>11</sup>とも述べている。

作品の中で想定されている現在の時点から見ると、上記の引用に出てくる橋での体験は五十年前にあったことである。『反橋』の最後で、行平はその経験のあった場所に戻り、そこを自分の目で確かめようとする。しかし、なぜ行平は自分の人生を狂わせた事件の現場に戻る必要があったのだろうか。ただ不愉快なことを思い出すためだけであったのだろうか。いや、そこで行平が経験したことは彼の人生の中で大きな意味を持っていたはずである。初老の行平は、自分の人生の墮落の始まりである橋の上に戻ることによって何かを取り戻そうとするというよりも、自分にも理由が分からないままに不思議な衝動によって、つまり無意識的な心理的動機によって原点に戻らずにいられなかったようである。

痛ましい体験をした人は、何らかの形でそれをコントロールしようとして、自らその経験を繰り返すとフロイトは『快感原則の彼岸』で述べている。行平はその体験によって悩まされていたからこそ、反橋に戻ってもう一度登ってみたのである。このように、精神分析の理論が主人公の行動の背景にあると考えられる。また、このような精神分析的な要素は『住吉』連作の別の作品にも現われているのである。

### 『しぐれ』の夢分析と感情転移

『住吉』連作の第二の作品『しぐれ』の中心には夢があり、川端の他の作品（『母国語の祈祷』(1928) や『弱き器』(1924)）と同様、『しぐれ』に出てくる主人公は夢を見た後、その連想の中

で分析しようとする。まずここでの大きなテーマは「感情転移」である<sup>12</sup>。フロイトは、感情転移は一人の人物に対する感情をそれとなく別の人に向けることであると解いている。感情転移は『しぐれ』『住吉』『隅田川』の三作に著しく現われている。

『しぐれ』は、主に三つの部分に分けることができる。最初の一部で主人公は五一歳で亡くなった芭蕉と八二歳まで生きた宗祇という二人の歌詠みについて連想する。老人となった自分と若死にしてしまった友人の須山とこの二人に比較する。その直後、短い夢を見る。その夢の部分を以下に引用する。

…私は乱離の世を古典とともに長生きした宗祇がなつかしまれるところもありまして、駿河の宗長の庵にも二三次行つたことのあるのなどを思ひ出しながら浅い眠りにはいりますと夢を見ました。

私は手のデッサンを二枚見てをります。その一枚は明治天皇のお手のデッサンで黒田清輝が描いたものであります。もう一枚は大正天皇のお手のデッサンで、目がさめてからは画人の名を忘れましたが大正時代の洋画家が描いたものであります。一つはきびしい絵、一つはやらかい絵、この二つの手のデッサンを見くらべながら私は明治と大正との時代の象徴のやうに感じる胸の痛さで夢はやぶれました。<sup>13</sup>

主人公は夢を見てから目を覚まし、夢の意味を自分で探るように、自由連想をする。次々と彼の頭に浮かぶ想念が作品に描かれている。その連想をここで引用する。

目がさめて考へますと、私は黒田清輝の手だけのデッサンなど見たためしはありませんし、またそのきびしさは黒田の画風とは似つかぬものでありまして、実はアルブレヒト・デュウラアの手デッサンのやうに思へました。明治の画家といふことで黒田の名が夢に浮かんだに過ぎなかつたのでせう。デュウラアの手デッサンは画集でいくつも見て頭に残つてをりませうが、私の夢のデッサンは千五百八年作の使徒の手デッサンのやうであります。使徒の手は合掌して上向いてをりますが、夢の手は片手で下向いて甲の方が描かれてをりました。しかしあの使徒の手にまちがひはありません。目ざめた後にもその手の絵は消え残つてをりました。もう一つの手ははつきりおぼえられませんでした。<sup>14</sup>

この夢は『しぐれ』のプロットを展開させる役割を担うより、主人公の心理を描くために登場すると思われる。ここで、行平自身の夢分析を考察する。最初、天皇の手として夢に登場したデッサンは、実は明治天皇の手ではなく、デュウラア（Albrecht Dürer, 1471-1528）の使徒の手であると行平は思いつく。複数の念が一つのイメージとして夢に現われることがこの場面の特徴で

ある。二枚のデッサンの中で、それぞれの時代とそれぞれの天皇が一つのイメージに圧縮されている。夢の意味を求めて、行平は次のように連想を繰り広げる。

起き上がったついでに明かりをつけてデュウラアの絵集を持って寝床にもどりました。使徒の手を見ながら同じやうな形に合掌してみました。しかし私の手は似てゐません。甲は幅広く指は短く、そんなことよりも罪人の手としか思えない醜さなのです。

私はふと友人須山の手を思ひ出しました。さうでした、この使徒の手は須山の手に似てをります。<sup>15</sup>

デュウラアが描いた手は亡くなった須山と同じような美しい手であると行平は述べる。逆に自分の手は犯罪者の手であると考え。これは主人公の心理を解く鍵の一つと考えるべきであろう。ここで二つの糸が見られる。一つの糸は、旅の詩人宗祇から大正天皇を経て、自分の犯罪者のような手まで通るものである。もう一つの糸は、芭蕉から明治天皇を経て、友人の須山の美しい手まで通る。この二本の糸に、主人公の無意識における自己評価が見られる。主人公は孤児で、友人に死なれ、旅人のように人と繋がりのない人間である。これは哀れな「しぐれ」（秋の冷たい雨＝生命の終わり）と呼ばれる詩人宗祇と共通することであるように考えられる。次のイメージは、夢で言及される病弱な大正天皇である。不眠症で苦しむ行平は健康でなかった大正天皇と自分とを比較する。（『しぐれ』の結末で、同じ主人公は「生まれる時から」ずっと墮落していると述べる）。最後にデュウラアが書いた手のデッサンと自分の手を見比べて、自分の劣等感が明らかになる。それと同時に、行平は世界的に最も有名な俳人の一人である松尾芭蕉と須山を比較する。芭蕉と須山との共通点は、両者とも旅人であることと、若死にしたということの二つであろう。

明治天皇は明治時代を代表する人物であり、明治時代は華やかで、封建制度を脱ぎ捨てた明るい時代であり、近代化をやり遂げ、日本を植民地化から守った時代である。そして、合掌をしている明治天皇の綺麗な手は須山に似ているというように描かれている。このようにして、主人公の無意識に存在する自己意識が表に現われる。自分は劣る人間であり、友人の須山は優れた人間であるというテーマが行平の心理の中に存在していることは明確である。この例でも主人公は見た夢と夢の前後に考えていることと重要な繋がりがある。川端はこのような主人公の自由連想を用いて主観的な心理描写を可能にしている。主人公の心理を描き出そうとしているのだと考えられる。

行平は手のデッサンのことを思い出してから、さらに須山のことを連想する。そこで、『住吉』連作のもう一つのテーマが現われる。主人公と須山は浅草で双生児の売春婦を「買いなじんてい

た」と書かれている。双子の娼婦は見分けつかないほど互いに似ていると行平はいう。二人の売春婦が作品に現われるのは特別な理由があると思われる。後で論じるように、主人公の無意識に姉妹の娼婦は主人公の母とその姉の記憶に通じている。双子の魅力は主人公の二人の母に対する愛や思い出を娼婦らに転移できるということに由来する。双子の娼婦と二人の母をつなぐもう一つのイメージが後に現われる。『しぐれ』では、主人公の思い出の中に出てくる須山との会話をここで引用する。

とつさに私は須山が昏倒するののかと思つて背を支へてゐました。私自身が怯えて須山に抱きついたのであつたかもしれません。

「おい、離せ。いそがう。」と須山は女の手を振りはらひ私の手も放しました。

この時が須山の手を見た最後でありました。

須山は双生児の娼婦の家の帰りにときどきこんな風に言ふことがありました。

「君は今日のやうに墮落したことがあるかい。」

「あるさ。生まれる時からだ。」と私は横を向いてしまひます。

「あいつらがふた子なのがいけない。しかもそのふた子は、造化の妙をつくしたやうによく出来きてゐる。君はあの二人の存在について真剣に考へたことがあるかい。」<sup>16</sup>

須山にとって、双子の売春婦との付き合いによる墮落はその夜に限るものである。しかし、行平にとって、その墮落は生まれつきのものである。これは一種の原罪であるが、その原罪とはキリスト教のそれではなく、彼が自分の父から受け継いだ原罪である。それは、「二人で一人、一人で二人」の女性との性を楽しむことである。彼は「私の出生が尋常なものではあるまい…」と考えている一方で、自分も父親と同じ関係を持っている。自分の尋常でない出生をもたらしした関係を自分自身が繰り返しているという意味で、行平は自分が「生まれた時から」墮落していると言っているように思える。

### 『住吉』における感情転移

次に、主人公の母に対する意識を考察して見る。

…昔では早婚といふわけではありませんし、幼い私は母が若いとも思はなかつたのですが、ものごころついて後には母の早い結婚によこしまな嫉妬をおぼえました。私が十七より下の少女を幾人かをかすやうなことになりましたのも、この嫉妬のなせるわざであつたかとも疑はれます。

思ひ出してみますと、幼いころに母の若さを気づいたことがないでもありません。私は母

の琴の師匠を憎んでをりました。母の琴の稽古を滅多にのぞきませんでした。琴の師匠を憎む心があるので近づきにくかったと言った方がよいでせう。<sup>17</sup>（強調は引用者による）

上記の引用文のように、行平は母が早婚したことに対する嫉妬を感じた。結婚はもちろんセックスと深くつながっており、主人公に母の性生活を支配しようとする願望が現われている。また、嫉妬の対象は言うまでもなく父親であるはずだが、父の姿は作品に現れない。森本稜は、『住吉』連作の全四品への注釈で、「よこしまな」という言葉を次のように説明する。

「本来、主人公と継母が通常の恋愛をするはずはないのだから、嫉妬の生じる余地はない」<sup>18</sup>

フロイトのエディプス・コンプレックスでは、すべての男の心の奥に母を支配しようとする願望があるという。その観点から見て、森のいう「嫉妬の生じる余地はない」とは言えないと思う。つまりこれは普遍的な現象であるとフロイトは精神分析入門で論じている<sup>19</sup>。この願望によって嫉妬を感じるだろうが、その嫉妬と十七歳以下の少女を犯すという行為との関わりはまったく説明されていない。川端はこの点において、主人公のエディプス期の結末と大人になった主人公の性行為が繋がっていることを言及している。行平にとってエディプス期は反橋の上での衝撃的な体験によって幕が下りた。フロイトは、小学校に上がる前に、男の子は自分の母が父の妻であり、自分の恋人ではないということを理解すると説明している。そして、父親の真似をして、いつか自分も母ではないが、母のような女性を妻にできると考えて母との想像上の恋人関係をあきらめる。しかし、行平は住吉神社の反橋の上での経験によって、突然にエディプス期の終結を迎えており、ここには問題がある。まず、母は本当の母ではないので、ある程度までは、その恋人関係をやめる必要はないと考えられる。また、父親の真似をするならば、姉妹との性的関係を繰り返す必要がある。

そこで、行平が大人になってから、二つの問題を引き起した。一つは、未成年との強制的な性関係を繰り返すことである。行平は犯罪的な性関係を繰り返しているという点に注目する必要がある<sup>20</sup>。行平の相手が十五、十六歳位であり、これは母が結婚した年齢である。すなわち、母が未成年のまま結婚したという事実が、行平が未成年と性的関係を持つとうとする原因であると考えられる。ここで行平は母に対する性的感情を十七より下の少女に転移している。転移する相手の選択は母の若さとの共通点を持つことによるものだろう。これと同様に、行平が双子の売春婦との関係を選んだことも、彼の両方の母親に対する感情がこの二人の娼婦に転移されているからである。

エディプス・コンプレックスには、母に対する恋に加えて、父に対する嫌悪が必要条件である。無意識に抑圧された母への恋は犯罪の原因であるように描かれているが、父親に対する嫌悪は直

接作品の中に現われない。そこで、上記の引用の中で「思い出してみますと、幼いころに母の若さを気づいたことがないではありません」と言っているところと、「私は、母の琴の師匠を憎んでをりました」というところの関係を考える。この二つの文は、その直前の「私が十七より下の少女を幾人かをかすやうなことになりましたのも、この嫉妬のなせるわざであったかとも疑はれます」と殆ど論理的な関係がないのだが、川端は改行せず、続けて書いている。さらに、「思ひ出してみますと」というように、この二つの念がつけられている。このことから、この「自由連想」的な表現は、母が早婚したこと、自分が未成年の女たちを犯したこと、そして自分が琴の師匠を嫌ったことの三つが、行平の心の中で密接な関係を持っていると考えられる。

母が早婚したことに行平が嫉妬しているのだとすれば、その嫉妬の対象は父親に他ならない。しかし行平がここで父ではなく、年寄りで目の見えない琴の師匠を思い出すことの意味は何だろうか。行平の無意識の父親に対する嫌悪は、意識に登場する際には琴の師匠に向けられている。琴の師匠を嫌う他の理由の一つもない。フロイトの思想で、転移の的には元の嫌悪の対象者と類似する特徴があるとされる。父と師匠とは共に男性で、母よりかなり年上である。琴の師匠に対する行平の不合理な嫌悪は、無意識に抑圧された彼のエディプス・コンプレックスによる父に対する嫌悪の転移であるというように川端は書いているのではないかと思われる。

子供の行平は琴の稽古を邪魔し、背中が痒くて母に搔いてもらおうとする。そして、母親に琴爪で背中を搔いてもらう。同じ琴爪は行平の実の母の形見である。生みの母の爪で養母に背中を搔いてもらうと行平は興奮する。背中を搔いてもらうことは、性行為とどこかに似通っているように思える。その後、行平は足袋を脱いで足の裏を搔いて欲しいというが、母はそれを断る。これは、母が性的関係を拒んでいるようにも考えられる。また、『住吉』連作の第四作『隅田川』の中で、行平は双子の娼婦の一人に足の爪で背中を搔いてもらったことを思い出す。母が拒んだことを数年後、娼婦にしてもらうというように解釈できる。その場で行平は母が綺麗だったことと思い出し、母の姉（行平の実の母）は養母にそっくりだったのだらうと語る。このように主人公は、そっくりの養母と実の母というモチーフを、瓜二つの双子の娼婦によって反復している。二人の母に対する愛情を双子の娼婦に転移することによって、行平は死によって失われた母の愛を取りもどそうとし、再現しようとしていることを考えられる。川端はこの二組の女性の相対的關係によって無意識に存在する内容を表現している。

ここで、川端作品の中にエディプス・コンプレックスを見つけ出すことが、本稿の目的ではない。例えば、稲村博は『川端康成芸術と病理』<sup>21</sup>で、『住吉』連作に出てくる夢において「作者はフロイトなどに親しみ、夢やその解釈にも深い関心を持っていたらしい…」と指摘している。川端はフロイトの思想に興味を寄せており、主人公の意識下の世界まで描こうとしていたということをごここで特に強調しておきたい。本章で見たように、母に対する感情は娼婦や十七歳以下の少女に向けられ、父親の嫌悪が琴の師匠に向けられた。また、川端は主人公の反復衝動を描き出

すことによって、意識下の世界を描写している。次節では、『住吉』連作の最後の作品『隅田川』に、フロイトが『快感原則の彼岸』に紹介した諸概念をさらに見ることができることを論じる。

### 『隅田川』におけるタナトス

行平の行動の背景には二種類の本能があるように川端は描いている。一方で、エロスの衝動、つまり、生きるための行動であり、より大きなものになるための行動、人や物とのつながりを持つとうとする行動が多く見られる。これは、養母との触れ合いの記憶や娼婦との交際、十七歳以下の少女との不純な性的関係、友人との交流などを持つとうとすることで見ることができる。それに加えて、行平には「死の本能（タナトス）」も見られる。既に『水晶幻想』（1930）には「死の本能」という言葉が現われており、これは川端自身が知悉<sup>ちしつ</sup>していた概念であると考えられる。

従来の研究では、『隅田川』に描かれているのは、タナトスではなく、「子宮回帰」と説明されている。例えば、栗原雅直と原善は川端の作品に出てくる母の胎内への回帰願望について論じており、特に原善は、川端の作品に美しい少女への愛情を媒介として母への回帰を実現しようとする描写があると指摘している<sup>22</sup>。また、原は『川端康成の魔界』で、『住吉』の主人公の最終行き先は母親の子宮であると説明している<sup>23</sup>。原によれば、母の子宮への旅は己の過去を逆行する形で己の出生の秘密を発見しようとするものである。しかしながら、隅田川にはその到達点（母の子宮）ないし到達点を象徴する空間が現われてこない。さらに、原は主人公が子宮へと帰ろうとする動機も明確にしていない。『住吉』に描かれているのは、原がいう子宮回帰とは別のものである。ここで川端が描いているのは、主人公の心に芽生える「生きる本能（エロス）」と「死の本能（タナトス）」の結合である。以下、それをさらに説明する。

『快感原則の彼岸』で、フロイトは全ての生命はその生態の選ぶ死に方で死のうとすると書いている<sup>24</sup>。『快感の原則の彼岸』は、『住吉』連作の最後の作品『隅田川』（1972）<sup>25</sup> で大きな影響を及ぼしていると思われる。例えば、『隅田川』が始まる時、二人の母と親友の須山は何年前かに亡くなっており、行平は孤独な老人である。子供の頃、継母が謡曲の『隅田川』をよく詠んでくれた記憶が行平の頭に浮かぶ。能楽の『隅田川』（観世十郎、1394-1432）は、誘拐され、殺された子供の母の話である。謡曲の中で、子供が誘拐されてから一年が経ち、隅田川のお寺まで母親は子供を捜しに行くが、悲しみに耐えられなく、狂ってしまう。そして、母親が隅田川でその子の幽霊を見て、話が終わる。原善は『川端の魔界』<sup>26</sup> の中で、『隅田川』について、「実母は死んでおらず、五歳のときの反橋での打ち明けは、実母の発狂故かとすら考えられる…」と説明している。また、森本穂の『魔界遊行』では、『隅田川』の切ない終結は、離された母と子が「めぐりあっても、生者と死者の違いは超えることができない。その絶望的な出会いこそ、『隅田川』の真の主題なのである」と説明されている。この二つの解釈の共通点は、主人公が母（養母も実母も）との再会を望んでいるということであり、それが死によって不可能となっているとい

うことである。

上記の二つの解釈と精神分析の思想を踏まえて、次のように解釈ができる。行平の心的苦痛は、実の母に愛されていないから捨てられたのではないかと思うところにあるようである。行平には『住吉物語』や『隅田川』という空想世界に逃げる傾向があると描かれている。それによって、彼は捨て子であることの悲しみ、母を失った悲しみを和らげようとするのである。最終作品『隅田川』では、行平は能楽の『隅田川』の中に描かれているような捨て子ではなく、誘拐された子である。さらに五歳の時に知らされた母の死は、実は謡曲と同じように、愛していた大事な息子を失ったために母が狂って死んだという空想である。そのために、謡曲の『隅田川』の話が『住吉』連作に出てくるのではないかと考えられる。

老人の主人公は生みの母の死因が狂気であると考えるところで、唐突にその前の日の出来事を思い出す。

今日の今、渡部の海辺の宿に来てますが、きのふ、東京駅の通路で不意にマイクロホンを突きつけられました。ラヂオ放送のための街頭録音のやうでした。

「季節の感じを、ひとことふたことと言って下さい。」

「若い子と心中したいです。」

「心中？女と死ぬことですね。老人の秋のさびしさですか。」

「咳をしても一人。」<sup>27</sup>

上記には、不透明な部分がある。一つは、なぜ行平は死にたいのかということである。またもう一つは、彼が若い女性と死ぬことを望む理由は何だろうかということである。まず、「咳をしても一人」という尾崎放哉の自由律俳句が出てくるのは、行平の孤独感である。行平の人生では、孤独が中心的な問題である。若い時、彼は孤独をしのぐためにエロスを極めて、双生児の娼婦と遊んでおり、未成年の女性との乱れた行為を繰り返していた。老人となった行平は孤独で、一生涯続けて女性と健康的な関係を築くことができなかった。唯一の友人が早死にし、娼婦の魅力は薄れた。そこで、行平の生きる衝動と死ぬ衝動の緊張感はバランスを崩し、死への衝動（タナトス）の方が強くなった。しかし、若い女性を媒介とし、継母や実母の思い出を楽しむ行平は、若い女性を求めざるを得ない。このように、行平はタナトスの中で母への再会を望んでいる。「若い子と心中したい」の中に出てくる「若い子」とは、作品の他の部分が表示すとおり、早婚した継母と十代で行平を出産した実母の象徴であろう。しかし、これが示すのは「子宮回帰」ではない。なぜなら、例えば川端の他の作品の『みづうみ』（1955）の中では母の故郷の湖が子宮の象徴であり、また、『眠れる美女』（1961）では夢で見る母の家が子宮を象徴する空間であるのに対して、『住吉』連作には母の子宮を象徴する空間が存在しないからである。母という原点に戻りたいと

というのは、『反橋』で見た原風景に戻る衝動や、母とのスキンシップを娼婦で再現しようとするという場面、あるいは、昔の思い出に耽ることのように、以前の状況に戻る衝動の現われであるように描かれている。行平は若返りしようとしているのではなく、自分の孤独から逃げるように、生と死の境界を越えるという死の本能と同時に、若い人から生きるエネルギーをもらおうとするエロ的な本能を同時に感じているというように読めるのではないか。川端はこのように複雑な主人公の心理を描いているのである。

## 結論

『住吉』連作の主人公と川端自身とは幾つかの共通点を持っていた。行平と同様、川端自身も孤児で住吉神社の近くで親戚に育てられた。また、自分の生みの母は元々父親の兄と結婚していたという複雑な家族関係があった。『住吉』連作の主人公と同様、川端は芸術品を収集しており、古典に親しかったこともある。『住吉』の主人公は自殺を仄めかしたが、川端は『隅田川』を書いてしばらくしてから、自ら命を絶った。つまりフロイトのいう「自分が決めた死に方によって死のうとする生物の本能」通りに川端は死んだ。主人公との共通点や、自殺の仄めかし、出版のタイミングから考えて、この小説の中に川端の死生観が映し出されているということは十分に考えられる。特に、作品に描かれた人間の心理に関する川端の思想に注目すべきである。本論文で論じたように、そこには、感情転移、圧縮、反復の衝動、死の本能、そしてエディプス・コンプレックスなど、フロイトの思想の大きな影響を見ることができる。これらのフロイトの思想を視野に入れて、川端作品を分析すると作品の形成の過程の理解を深めると思える。

- 
- 1 川端康成、1981。「反橋」川端康成全集第七巻。新潮、pp.375-386
  - 2 川端康成、1981。「しぐれ」、川端康成全集第七巻。新潮、pp.387-397
  - 3 川端康成、1981。「住吉」、川端康成全集第七巻。新潮、pp.421-432
  - 4 川端康成、1981。「隅田川」川端康成全集第八巻。新潮 pp.597-606
  - 5 フロイト、1970。「自我論」快感原則の彼岸。日本教文社、pp.16-17
  - 6 同上 pp.20-21
  - 7 同上 pp.15
  - 8 フロイト、1971。フロイト著作集第一巻。人文書院、p.278
  - 9 同上 p.274
  - 10 川端康成、1981。「反橋」、川端康成全集第七巻。新潮、pp.384-385
  - 11 同上
  - 12 Freud, S. 1962. *Five lectures on psychoanalysis*. Pelican Books
  - 13 川端康成、1981。「しぐれ」、『川端康成全集第七巻』。新潮、p.392

- 14 同上
- 15 同上 p.393
- 16 同上 p.392
- 17 同上 p.430
- 18 森本稷、1984. 注釈 遺稿「雪国抄」「住吉」連作。林道舎、p.68
- 19 フロイト、1971. フロイト著作集第一巻。人文書院 p.276
- 20 フロイト、1970. 快感原則の彼岸。日本教文社 pp.21-22
- 21 稲村博、1975. 川端康成・芸術と病理。金剛出版、p.207
- 22 原善、2000. 川端康成その遠近法。大修館書店、p.160
- 23 原善、1987. 川端康成の魔界。有精堂 p.37
- 24 フロイト、1970. 快感原則の彼岸。日本教文社、pp.44-45
- 25 川端康成、1981. 「隅田川」川端康成全集第8巻。新潮、pp.599-606
- 26 原善、1987. 川端康成の魔界。有精堂、p.34
- 27 川端康成、1981. 川端康成全集第八巻』、「隅田川」新潮 pp.601-602